

日本語学・日本語教育学部会

【概要】

河野 礼実*

日本語学・日本語教育学部会は、12月13日午後14時から16時40分まで人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟6階大会議室にて行われた。

本部会においては、大学教員2名によるご発表と、大学院生3名による研究発表が行われた。以下、それぞれの発表内容をまとめ、報告する。

1. 小野舞子（お茶の水女子大学大学院生）

「『サントスの御作業』におけるモノナリ文のモダリティ性 —近世語資料との比較対照を中心に—」

小野さんは、近世初期のキリシタン資料『サントスの御作業』に頻出する文末表現「モノナリ」に注目し、そのモダリティ性について発表された。資料を用いた調査の結果、『サントスの御作業』に見られるモノナリ文の大半は、説明の形式「ノダ」に相当する機能を持つということを明らかにされた。

さらに、『サントスの御作業』と同時代（近世初期）の資料、および、それ以降の時代の資料との比較により、モノナリ文が持つモダリティ性の変化についても分析された。分析の結果から、『サントスの御作業』では、“説明のノダ”的なモノナリは、知識表明的な態度を取る例が大半だが、同時代の狂言資料では、推量をもとに理由づけて判断する態度のものが多くということを明らかにされた。また、近世後期になると、「ノダ」が定

着したため、“説明のノダ”的なモノナリ・モノジャは用いられなくなったと考察された。

2. 曾寶儀（国立台湾大学大学院生）

「「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞に関する一考察 —共起表現をめぐって—」

曾さんは、「～さ」派生名詞と「～み」派生名詞について、その意味用法や相違点を明らかにすることを目的とし、(1)語基の性質、(2)構文の特徴、(3)共起動詞という3つの観点から考察を行なわれた。

(1)語基の性質の観点からは、「～さ」派生名詞は意味範疇が広く、共起する名詞・動詞が多様である一方、「～み」派生名詞は、語基の分野によって意味用法が限定されると考察された。(2)構文の特徴からは、「～さ」派生名詞は、「Nの～さ」という形でよく用いられ、Nにより意味が限定されるが、「～み」派生名詞は、前に名詞をとらず、それだけで意味が完備されており、意味の具体性・明確性が強いと述べられた。(3)共起動詞の観点からは、「～さ」派生名詞が思考や伝達の意味を持つ動詞と共起する一方で、「～み」派生名詞は、話し手が事柄の内容を「中から外へ抽出しようとする」内容で使用される傾向が強いと考察された。

*お茶の水女子大学大学院生

3. 宋恵仙（仁徳大学）

「第三者のやりもらい構文の構造とヴォイス性」

宋先生は、自動詞構文や人への働きかけ性を持たないモノゴトへの働きかけの他動詞構文が、やりもらい構文になったときに、どのようなやりもらい性やヴォイス性を持つのかを、小説などの用例を用い、分析された。

その結果、まず、やりもらい性については、元になる他動詞構文に存在していなかった利益対象人物が新たに構文に加わることを明らかにされた。利益対象は、「てやる／てくれる」構文では「のために」、「てもらう」構文では「二」格および「を呼んで」「を／に頼んで」で表されると指摘された。次に、ヴォイス性については、元になる動詞文に存在していなかった人物が新たに構文に加えられ、その人物は使役態と同じく、動作主体にある行為を仕向ける依頼主としての性格を持つということを明らかにされた。

4. 陶思含（北京外国語大学北京日本学研究センター院生）

「中国における高校日本語新人教師の不安についての事例研究」

陶さんは、中国の高校で日本語を教える新人教師が抱えている不安、およびその不安に対する自己変容の過程を、2名の新人日本語教師に対するインタビュー調査の結果から分析された。

対象となった2名の新人教師（A先生・B先生）は、両者とも「授業実践力」、「学生との関係」、「学校システム」に対して不安を持っているということが明らかになったが、その中でも授業実践力について最も不安を抱えているということが共通していると陶さんは述べられた。しかしながら、変容過程については、両者に違いが見られ、A先生が他者からの支援を受けていた一方で、B先生は

自己の振り返りにより不安を解消していたと指摘された。最後に、インタビュー調査の結果をふまえ、新人教師へのサポートの必要性について述べられた。

5. 朱桂栄（北京外国語大学北京日本学研究センター）

「中国の日本語教育と協働学習」

朱先生は、中国の日本語教育において協働学習が求められる背景、および協働実践の理論と現状についてご発表された。

現在、社会的背景の変化から求められる人材も変化し、中国の日本語教育では教育の質的向上が求められている。そのような中で、これまでの教育のありかたが問題視され、新時代の人材育成にふさわしい学びのありかたとして「協働」「協働学習」が注目されるようになったと朱先生は述べられた。実際に中国の日本語教育授業において実践されている協働学習についてご紹介くださり、協働学習には「互助型学習」と「創造型学習」があると説明された。また、協働型教師コミュニティの取り組みについてもご報告くださり、教師が実際に協働学習を体験することの重要性、そして教師間の協働の重要性についても指摘された。

以上、日本語学・日本語教育学部会における2名の先生方、および3名の大学院生による研究発表についてまとめた。異なる背景を持った人たちが集まり、研究を通して交流が行われた非常に有意義な会であった。今後も分野、機関、国を超えた交流が期待される。